

2013年3月12日・徳島新聞「鳴潮」欄では

永瀬十悟句集「橋朧 ― ふくしま記」

＜激震や水仙に飛ぶ屋根瓦＞。本社に届いた句集を時折開く。福島県須賀川市に住む永瀬十悟さんの「橋朧―ふくしま記」だ。東日本大震災で自宅は半壊し、寝袋にくるまって詠んだ作品が収められている

＜蜃気楼原発へ行く列に礼＞。原発事故で作業に向かう人たちに畏敬の念を抱きながらも、先の見えない不気味さを感じていたという。身の回りの自然や命の営みを詠むことから「この不条理を詠まなければ」との思いが膨らんだ。

震災後の2カ月、＜産土を汚すのはなに梅真白＞＜県境にとどまる宅急便と春＞など「ふくしま」50句を詠む。福島の今を伝えられれば、と応募し2011年の「第57回角川俳句賞」を受賞した。句集には「ふくしま」も収録した。

俳句を始めて30年以上になるという永瀬さん。どんなときでも「詠まなければならない」「これを詠めずにどうするんだ」と自らを鼓舞。それは「冷静さを取り戻すことにつながった」と述懐する。

＜流されてもうないはずの橋朧＞。橋朧とは…。句集を発行したコールサック社代表で詩人の鈴木比佐雄さんが記している。「地震・津波・原発事故で失ってしまった限りない思い出を象徴している言葉だと私には感じられる」

永瀬さんは不安や怒り、悲しみ、慈しみをすくい上げ、見えない放射線とも対峙する。一句一句に古里福島で生きる人、育った人の思いが重なる。

と紹介されています。